

開会 平成30年8月24日  
閉会 平成30年8月24日

# 足利市総合教育会議

足利市教育委員会

## 平成30年度第1回足利市総合教育会議会議録

1 開催日時 平成30年8月24日(金)  
開会 午後3時30分 閉会 午後4時50分

2 開催の場所 足利市役所4階 特別会議室

3 出席者

市長	和泉 聡
教育長	若井 祐平
教育委員	笠原 健一
教育委員	櫻井 淳子
教育委員	市橋 雅子
教育委員	菊地 義典

4 会議出席した事務局職員

総務部長  
教育次長  
行政管理課長  
市民生活課長  
市民生活課主幹  
教育総務課長  
生涯学習課長  
青少年センター所長  
学校教育課長  
教育総務課庶務担当総括主幹  
学校教育課指導担当指導主事(主幹級)  
教育総務課庶務担当主幹  
学校教育課指導担当指導主事  
教育総務課庶務担当主査

5 傍聴者 1名

6 会議日程

日程第1 議題(1) 小中学校における英語教育について

## 議題（2）子どもの見守りについて

### 7 議事の経過

- 開会
- 和泉市長あいさつ（要旨）

教育委員の皆様には、日頃より本市の教育行政にご尽力いただき、あらためて御礼申し上げます。また、本日は本年度、第1回の総合教育会議にご参集いただきまして、ありがとうございます。

つい先日、市内の全小中学校の校長先生と懇談する機会があり、現場の先生が抱えている課題、日頃の思いを聞かせてもらい、大変有意義な時間を過ごさせていただいた。

また、今年は猛暑ということもあり、校長先生方からエアコンをつけたことに大変良かったという言葉をいただいた。全国的にはニュースなどでみると、まだまだエアコンがついていない学校もあることから、いち早くつけてもらい大変良かったとのことだった。

本日の議題は、本日は、ご案内のとおり、議題として2件ある。

1点目は、昨年、文部科学省から示された新学習指導要領の主な改善事項の一つに、「外国語教育の充実」がある。具体的には、小学校中学年で「外国語活動」を高学年で「外国語科」を導入して、小中高等学校一貫した学びを重視し、外国語能力の向上を図ろうとするものである。そのような中、足利市の小中学校における英語教育の現状と今後の課題について情報共有していきたいと思う。

2つ目の議題にある内容は、先日、新潟市で、下校中の小2児童が殺害されるという痛ましい事件が発生した。足利市としても、市全体として子どもを見守るという視点から、機運を高めていかなければならないと感じている。

本日は、子どもたちにとって何が必要か、最善かという視点に立って、教育委員の皆様と意見交換をしていきたいと思う。

- 若井教育長あいさつ（要旨）

長いと思っていた夏休みも残すところ、後10日ほどとなった。皆様のご支援のおかげで、一段とたくましくなって2学期を迎えられることと思う。

本当にありがとうございます。

市長からのお話にもあったが、新学習指導要領は、小学校では2年後に、中

学校では3年後に完全実施となる。今回の新学習指導要領改訂の柱は大きく2つある。1つは、社会に開かれた教育課程、私は、簡単に言うと地域みんなで学校と地域が一緒になって子どもたちを育てていきたいと思います。本日のテーマの中に子どもの見守りについてがあり、これに大きくかかわってくる改訂の柱であると思う。もう1つは、「主体的・対話的で深い学び」アクティブラーニングということで名前が通ってきた。これは、先生方からの一方的な講義形式の授業ではなくて子どもたちが自ら能動的に授業に取り組むような趣旨である。従って、今日の2つ目のテーマでもある。小学校・中学校の英語教育、これを子どもたちが能動的に自ら進んで学ぶことを目指している。この2つのテーマで話しあうわけだが足利の子どもたちが自分の人生を楽しく生きていくためには、具体的にどうあったら良いのかというあたりを話し合えたらと思う。

## ○ 日程第1 議題(1)

### 市長

それでは、(1)「小中学校における英語教育について」を議題としたい。

3年か4年前だが、坂西北小学校3年生か4年生の英語の授業を見させていただいたことがある。小学校の低学年、中学年から英語に親しんでいる様子が伝わってきて、我々の時代とは全然違うなと思った。日常的な表現がスムーズである。我々の時代では英語はどうしても文法から入ったので、仕事で使うことになったときに、文法は頭に入っているのであるが、日常的なやりとりハードルを感じたという、私自身の経験がある。そういう点では、今の小中学校で行われている英語教育は、身近なところをハードル低く表現するようところに主眼が置かれているという印象を大変強く思った。子どもたちが外国人を前にした時、あるいは何かの機会に英語と向き合ったときに、入口としてのハードルを低くするという意味では、大変有意義だと思った。これから教育課程になるということで、足利市もある意味では先行してきたのであるが、この後全国的に英語教育が小中学校で、言葉で言えば当たり前になる中で、どのように差別化していくのか。入り口としての英語教育から、どのように本格的な英語教育につなげていくのかということが、益々課題として大切になってくると思っている。

では、私も現場を見させていただいてから時間も経っているので、百聞は一見に如かずで、映像を用意しているので、どのような英語教育が行われているのか、映像を見させていただいた上で、皆様からの意見を伺えればと思う。

## 委員

足利市の小中学校、特に小学校で英語の授業が先進的で充実していると諸先輩から聞いている。そういう中では確かに非常に力を入れて授業が行われていると思う。私たちが子どもの頃と比べて、外国人の先生がしっかりいらっしゃるので、そういう方が授業にいるということが、子どもたちにとって大きい経験になると思う。

この英語の授業の評価というかアウトプットがどうかというのを何で図るのか定かではないが、こういうかたちで早い段階から海外の方と触れ合う機会があるということは、将来的にきっと役に立つと思う。うちの子どもたちも小学校で授業を受けたが、先生とのふれあいとか楽しそうに話していたので、心の効果が大きいと思う。

## 委員

新学習指導要領になると、外国語が小学校5、6年生で教科になるということで、70時間週2コマになる。小学校3、4年生が外国語活動で年間35時間、足利の場合は以前からやっているのだから、プラス各学年10時間、現在でも1年生からやっていると思う。今までのプリントを見ると、聞くというヒアリングの力については聞いている。外国語活動というと、聞くこと話すことがメイン。外国語が教科となった場合、それに文字を入れて、読むこと書くことというのが、5年生から入ってくるということで教科学習になる。その時にライティングとスピーキングの指導の充実が問われてくるという気がする。単に聞いてわかるというだけではなく、先ほど市長も入り口としての英語教育から本格的な英語教育にどうもっていくかというあたり、そこが小学校から教科になるので書くことも入ってくるのである。

今までなかったものなので、現場としては、小学校の英語は免許状もない。中学校の英語というものはあるが、中学校の英語をもっている先生が小学校にいれば充実するかと思うが、小学校の先生自体は小学校課程だと英語が入ってなかったのだから、ないことが入ってくるということで、抵抗感がある。勉強してやっていたらなければならないという部分で、ALTやEAAの力を借りるということであるが、ビデオにもあったが、小学校の場合は子どものことを一番知っているのが担任である。担任主導、担任がリードしていくというかたちになると思う。担任が十分英語教育についての理解をしていないと授業自身がうまくいかない。

現場では、今年から移行期になっているが先生たちに困り感が出てくるのでそれを教育委員会ではサポートをしなくてはならない。足利市の場合は、昨年度に小学校英語教育指導計画改定版ができていたのでそれを現場ではやっている。ただ実際、計画と実施ではずれもある。中学校ではCAN-DOリストが

できて、実際やっているのので、小学校から中学校のつなぎの部分について、CAN—DOリストに統一していくという考え方もあるかと思う。現在のものは新学習指導要領に対応しているものと思うが、いずれにしてもやること自体は良いことであるが、現場の先生方は負担が増える。さらに3年生から6年生は35時間増える。何かが減って増えるのではないので、内容的にも時数的にもきつい。混乱がでることが予想される。

## 市長

小学校の先生の負担感について現場の生の声を聞きたい。

## 事務局

今年度から移行期で、5、6年生で「書く」ということがはいつてきた。学習指導要領の捉えも、基本はやはり話す、聞くというところで、書くことはあくまでも慣れ親しむ段階であるにとらえていて、話す、聞くが中心で、書くと読むに関しては真似事的にとらえている。学習指導要領の中では、書き写すという表現である。先生がモデルを示した、もしくは今日やった表現を一文、写して書いてみようという段階の積み重ねをしていく。その積み重ねの中で本格的に書くことにつなげていくのが中学校。あくまでも段階的に慣れ親しみ書くこと、聞く、話す、そうすれば書くという高まり感が出てくるだろうということである。それから本格的に中学校で四技能、読む、書く、聞く、話すを高めていこうというねらいである。

実際、一学期、先生方に訪問等で聞いたところ、「書く」というところに困り感をもっていらっしゃった。どのように指導をしていったらいいのか、最後のところの一文書くというのは何となくわかる。でも実際に、アルファベットの書き順や4線上に書き写すといったことをどのように具体的にやっていくかというところで、先生方の統一感が図れていないので、困り感はあると思う。

## 市長

先ほど、委員からも何でアウトプットを図るのか難しいという話があったが、私もその通りだと思った。このことを考えたときに、学年に応じた効果を含めた検証をしていかないと、当たり前ではあるが、足利市も先行してやったきたわけだが小学校1、2年生にどれだけ効果があったのかという議論と、中学校1、2、3年生にどれだけ効果があったのかということは当然違うと思うが、過去に年齢別に検証したことはあるか。

## 事務局

ない。

## 市長

リスニングの力はあるけど、ライティング、スピーキングはということも出た。これからは、年齢別にわけて対策、効果、どんなアウトプットが得られているか、インプットが得られているか、学年ごとに全然違うと思う。これから教科化になるにしたがって、ますますそういう視点が必要なのかなと思う。それを踏まえた上で、足利市として独自にどこに力を入れていくのかという議論がないといけない。当たり前ではあるが、同じ投資をしたとしても、小学校1年生と中学校3年生では全然違う。

## 委員

どの教科もそうだが、子どもたちには、好きになってもらいたい。身近で慣れ親しんで、その教科に興味を持ってもらいたい。そこから実際に勉強が始まっているのだと思う。ビデオを見ても、そういった雰囲気づくりというものがあると思うし、いい光景が見られたと思う。

もう一つ、身近で気楽で、アドリブでしゃべれる英語というのがあってほしい。子どもたちには、最初は型にはまった会話等で始まるのは当然だが、自分たちが話すこと、話す内容を持っていてもらいたい。例えば、部活をやっていることでも、読書をしていることでも、あるいは、足利市の文化や歴史を知っていることでもなんでもいいが、ツールがしっかりと自分のところがあれば、それを何とか発揮して、持っている言葉だけでいいし、文法があってもなくてもいいと思う。発音が多少ずれていてもかまわない。しっかりとした知識や経験を持っていれば、しゃべってみるという自信にはつながると思う。うわべだけで自分の経験がないとなると、なかなかそれはしゃべれないと思う。とにかく、自分に確固たる自信があると、子どもたちもその場面において、気軽に会話につなげてみたいという意識も持てるのではないかなと思う。そのためにも、英語教育と一緒にいろいろな自分自身が自信を持てる日々の生活というのを作れるようにすると、なおいいのではないかなと思う。

## 市長

私もずっと同じことを思っていて、人として伝えたい思いがあるとか、経験があるとか、その人間に中身があると、当然、英語で表現できることも広がってくるし、豊かになってくる。その人間が空っぽなのにいくら技能としての英語を身に着けても、薄っぺらなものにしかならない。これは、多分すごく大切なことで、英語教育とともに、そういうことかというと、私もずっと思ってきたが、自分の国語能力を英語能力が超えるはずはなくて、国語能力を伸ばさないと、英語能力も伸びてこないのは当たり前なことだと思う。

国語能力と言ったらなにかということ、さっき言われたような、自分にその伝

えたい中身がある、伝えたい熱い思いがある、そういう子に育ててもらわないといけないのだろうと思う。すごくこれは大切なことだなと思う。せっかく英語が教科として入ってくるので、そういう視点からの再認識というのを、ぜひ、現場の先生たちにも持ってもらいたいと思う。

## 委員

今の日本の授業数では、外国の人と接するのが楽しい、外国の文化を知るのが楽しい、外国のことについて勉強したい、そういう思いを育てるということで精いっぱいなのではないかと思っている。入口から本格的なところへ行くという、それができるだけたくさん子どもたちに根付くようにということだと思う。フィリピンなどは、算数とか理科を英語でやっている国なので、そういうところの英語力とは勝負にならないと思う。

もう一つ、伝えたいことをブローケンイングリッシュでいいから、それで恥ずかしくないのだという、そういうことを学ぶ機会を作ってもらいたい。正しく、きれいにしゃべらなければいけないというのではなく、伝えたいことがあれば、ブローケンでいいということで、今まで日本はやって来なかったと思うので、そういうところで、先生たちにも自信をもってもらいたい。先生たちも、さっきおっしゃたように、小学校に専門家がいないのであれば、それでもいいから、しゃべれることが大事ということ子どもたちに教えてくださいということ伝えていただきたいと思った。

もう一つ思ったのが、ヒアリングに関して、自分の経験で思うのだが、さっきのビデオでもゆっくりしゃべっている。なるべくスピードは速くしていかないと、と思う。こちらにいらっしゃる外国人の方は、かなりゆっくりしゃべってくれるが、私たちが向こうに行き行って苦労するのは、早く、それから、アメリカ語圏の方もいけば、イギリス語圏の方もいて、アフリカ語圏の方もいて、全然イントネーションとか違って、何が何だかわからないところだ。そういうことに慣れていった方が、世界中で使える英語になると思う。ヒアリングは、もう少し早くしても、子どもたちは大丈夫ではないかと思う。あんなふうにゆっくりしゃべってくれる外国人の方はいらっしゃらないと思う。子どもたちは、スピード感はあると思うので、ゆっくりだったかなと思った。

## 市長

先ほどビデオを見ていて、中三の最後のビデオで思ったが、教科書を使って理論的に英語を文法構造としてとらえるということも当然必要だし、やっていると思うがそのへんの、バランスはどういうふうに行っているのか。ああいう風景の授業だけではないと思う。その辺をイメージできるように説明してもらいたい。



## 事務局

文法表現を新しく勉強するといった時には、ALTとその新しく使う表現を用いたやり取りの中から、今日はこういう勉強をする、英語ではこういうことを言うときには、こういうふうに伝えるというような導入から入る。多少は書いて覚えるドリル的な部分ももちろん必要になってくる。そういう部分も含めて、なおかつ、書くだけではなくて、読むとか話すとかあるので、習ったことで話してみようというような、インプット、アウトプットという、そのつながりの繰り返しの中で、文法を覚えていく。そして、最終的に三年生の目指すゴールとしては、ディスカッションでお互いが話せるというところに持って行っている。もちろん、こういう授業だけではなくて、当然、生徒は先生の方へ向いて説明を聞いたりという、一場面もある。そういう場面も必要だと思うので、そういう場面を織り交ぜながら、なおかつ子ども同士のやり取り、英語なので、言葉を使うという道具なので、その道具としての子どもたちのやり取りを増やしながらか、活動を通してその形を覚えさせていくということになってくる。

## 市長

英語の授業の風景って、我々が中学生、小学生の時とは様変わりをしているのだと思う。

## 教育長

最初に、これからの国際社会に生きるという中で、国の方もだんだん英語を小学校の方まで下して来た。グローバル化に対応するためということだ。これから国際社会で生きる足利の子どもたちということを考えた時に、私は、三つ育ててもらいたいなと思っている。これは全部裏腹の関係にあるが、一つは、異文化理解というのか、自分とは違う相手がいるという存在、そしてそれを尊重していくのだという、そういう気持ちを、これから育てていかななくてはならない。当然、英語でコミュニケーションするときも、相手の気持ち、相手の立場も考えたやり取りができるようになっていかななくてはならない。

さらに、先ほど話題になった、自分という日本人としてのアイデンティティーというか、自分というものをしっかりと持っていないと、これからの外国の人と対等に付き合っていく中では、難しいだろうと思う。スプリングフィールド市に中学生を派遣するときに、最初に結団式の時にお話しさせていただくのも、いつもそこだ。向こうでいろいろなアメリカの人とコミュニケーションをとって来なさい、進んで積極的に話をして来なさい、そのときに、まず、自分とは異なる存在に気が付くよと話す。どっちがいいとか悪いとかではないという、そういう生き方、考え方もあるのだということ、広くとらえてもらいたいという思いだ。

小学校の指導体制は、今、足利では学級担任とALT、あるいはEAAがティーム・ティーチングでやっているが、私は、英語を小学校の場合は担任がやるべきだと思う。先ほど、委員もおっしゃっていた。子どものことをよく知っている、授業の流し方は学級担任がプロなので、それとALT、そういった方の力を使って、どの子どもはどこが弱い、どの子どもは何が好きというのを良く知っているのは学級担任であると思う。担任は自信をもって、英語については、担任も子どもと一緒に学ぼう、楽しもう、私は足利の先生方にそんなふうになってもらいたいと思っている。

それから、小学校3年生以上は、時間が週1時間多くなった。それで、校長会で1時間をどうしようかと昨年協議していただいた。1時間は45分の授業なので、15分ずつ、15分、15分、15分と3日間に分けて短時間でとるという方法もある、国もそれを認めていると話した。しかし、校長会の相談結果で、15分では、始まったと思ったら終わっている、なかなか身につかないということで、6時間の日を1日増やした。私もそれが一番いいと思う。

先ほど、低、中、高学年それぞれの評価、私もこれは、大事にしなければならぬと思う。低学年、1、2年生がどうなったか、やってみてどう変わったか、これは、必ず、これから具体的な観点を決めてやっていくべきだと思う。ただ、評価も見える学力、見えない学力ではないが、慣れ親しむとか、楽しいという関心・意欲の部分の評価を客観的にとらえるのは難しい。かといって、評価をしないで改善はできないので、観点を明確に持って、各校に教育委員会としても示していかなくてはならないと思う。

一番、今課題かなと思うのは、小学校と中学校の接続だ。小学校で楽しいということでやってきて、中学校に行くと急に文法になると、そういうことだと、中学校で英語嫌いというものが出てくる。あるいは、中学校の内容が、5、6年生に下りてくるので、5、6年生が英語はやだというようになっては困ると思う。中学校の内容が小学校に下りてくる、前倒しになるが、逆に中学校に入学した新1年生には、私は、中学校の先生方を小学校の指導法を学んでほしい。急に中学校で今までのやり方、机に座ってというよりも、小学校での指導方法を中学1年生の段階で、入学時期が一番そこを見てもらいたい。

最後に、先ほど、主体的対話的で深い学びとあったが、やはり英語でも主体的対話的で深い学びというのが出てくる。そのためには、今私が考えているのは、子どもが英語を話したくなる、英語を使いたくなる、そういう活動をこれから組んでいくことが大事だろうと思っている。英語を覚えなくちゃとか、使えるようにならなくちゃとかというのが目的ではなく、何か、ある活動を通して、これは英語がわかっていないとできないなど、そんな、教室からちょっと飛び出すような授業が、これから、足利はプラス10時間、国が示しているより多くやるので、そのプラス10時間というものを足利らしさの英語の授業

を、そこに展開していきたいと思う。

#### 市長

参考に聞かせてもらいたいですが、小学校 1、2 年生は、どんな授業数で、どんな中身をやっているのか。

#### 事務局

小学校 1、2 年生は、年間 10 時間、月 1 回程度行う形になる。内容としては、英語の出会いというところだと思われるので、単語を使って、活動を通して、単語を使った活動をメインに取り組んでいる。例えば、数とか、色とか、そういうものを、ゲームを通して活動を通して増えさせていくというところが 1 年生になる。2 年生は、そこに 1 回のやり取りが入るような、YES、NO で行けるようなやり取りが入った活動が組まれている。

#### 市長

A L T も 10 時間のこの授業に入っているのか。

#### 事務局

入っている。低学年の場合は、E A A が担当している。

### 議題（2）防犯カメラの設置について（市民生活課・大場主幹）

#### 市長

大場主幹は警察から来ていただいている、刑事生活が大変長い方なので、事件をよく知る視点から現場を見ていただいて、今日はいい機会なので報告をしていただいた。足利市においても地域によっては、老人クラブのようなお年寄りが子どもたちの見守りをしてくれたり、あるいはルーティンとして、どこの地域でも朝の通学の時間帯には育成会や P T A が協力して子どもの見守りをしていただいている。

一方で、今紹介があったように、防犯カメラというものが、防ぐという意味においても、あるいは何か起きた時に犯人にたどり着くという意味でも大変威力を発揮する時代になっていて、私も新聞記者時代に事件記者をしていたのでよくわかるが、30 年前の刑事さんは事件が起こると近所に目撃者がいないかどうかの聞き込みをした。今は事件が起こると、真っ先にどこに防犯カメラがあるか、防犯カメラに映像が映っているかどうかの確認をするのが捜査の中で重きをなしてきている。

大場主幹の方でこまめに子どもたちの通学路を歩いていただいたうえで、限られた予算ではあるが、防犯カメラを今年は3台ということで、毎年少しずつ増やしていきたいと思っている。

それでは教育委員のみなさんから、子どもの見守りと子どもを事件から守るという視点で、ご意見やお気づきのこと、あるいは問題意識でも構わないので、お話しいただきたい。

子どもの見守り活動について（青少年センター・丸山所長）

## 市長

町田や矢場川の取り組みは、市長の立場からしても大変ありがたいと思っている。町田の取り組みに関しては、3年ほど前に市長室に報告に来ていただいて、私からもお礼を申し上げた。これほど学校や父兄に安心してもらうのに有意義な取り組みはないと思う。地域のお年寄りが横を一緒に歩いてくれば、その間に事故が起きたり、あるいは連れ去りのような事案が起きたりということがなくなると思うので、大変ありがたい。では、ご意見でも所感でも、課題として感じられていることでも構わないのでお話しいただきたい。

## 委員

私の家にも安心の家ステッカーが貼ってあり、金属板になっていて腐食しないようになっている。地域によって学校によって対応はそれぞれだと思うが、今市事件があった頃や足利でも事件があった頃は熱心に取り組むが、年月が経つと地域のお年寄りも状況が変わってきたりすると思う。そうすると活動をうまく継続させていかないと、その人がいなくなったら終わりという状況になってしまう。活動が停滞してしまったり止まってしまうということで、時々見直しが必要なのではないかと感じている。特に、先ほど防犯情報の登録という話が出たが、私も携帯電話が変わる前は、必ず携帯電話に情報が入っていた。情報が来ると、今不審者が出ているんだと意識をする。あれは大変強力で、みんなの目で見るということで有効だと感じた。しかし、このところ登録者数が変わらないということは、増えていないのかなと思う。例えばPTAでも新入会員がいるわけなので、毎年増えていったらいいのではないかなと思う。ステッカーもしばらくすると風化してしまうので、そのへんの継続の仕方とかを常時見直して、継続していけるように手立てを打つ必要があると思う。

人家、人の目があるところでは子どもは守られるということを考えると、色々な人たちに協力してもらうということで、ガソリンスタンドとかコンビニとか事業所とか郵便配達の方とか町中を回っている人に安全パトロール中というものをつけてもらうことで、その人たちにも意識してもらい、不審者がいた

ら警察に届けるとかすぐに対応が取れる。そういう人たちは町の様子をよくわかっているの、いつもと違う雰囲気もすぐわかると思う。そういう人たちに広く関わってもらうような働きかけもいいと思う。

## 市長

今お話を聞いていて、道路に穴が開いていたら通報してくださいというのを色々な業界とやっているが、同じような趣旨で、郵便局もたくさん局員が動いているし、宅配業者もそうだし、ヤクルトはヤクルトレディも動いている、そういう視点で子どもへの見守り的な目も追加でお願いするということはあっていいのかなと思った。実際にお子さんがある委員はどうか。

## 委員

反省を込めてお話しすると、私がPTAの会長をやった時に、先代の会長から、安心の家ステッカーがだいぶ古くなっていて機能していないところもあるので見直してくれと言われた。しかし、なかなか見直しができなかったという反省がある。どうしたらできたかと考えると、それぞれの地区のPTAと、例えばその地区の自治会長さんと定期的にミーティングするとか、何かそういうことがないと、地域によってコミュニケーションが取れている地区もあると思うが、そうではない学校の地区もあると思うので、地域の方とPTAの親御さんたちが一堂に会するような行事が年に一回くらいあれば、安心の家が機能していないのでそれぞれの町内で見直してほしいなどと頼みやすかったかなと思う。そういう仕組みが欠けているところは、見守り力を強化する意味でも、もう少し地域の人が学校ベースで集まるような機会を作ったほうがよかったのではないかという風に思う。

## 市長

安心の家ステッカーは何年前に作ったのか。

## 青少年センター所長

平成9年度に作った。

## 市長

言葉は悪いが、時が経つとマンネリ化してしまうので、また新しいものに衣替えするだけでも見直しにつながると思う。それは私の方から事務局へ指示する。

## 委員

大場主幹のお話を聞いて、人の目というのがすごく予防になるんだなと感じた。ああいう所を誰が歩いているのかと想定したときに、犬の散歩をしている人が結構いるんじゃないかなと思った。私自身が車を運転していると、見守り隊のユニホームを見るだけで、登下校の時間だから運転に気をつけようとか思うので、犬の散歩をしている人に襷とかをかけてもらうのもひとつかなと思った。

## 市長

そういう目で見ると、工夫の余地はいくらでもあって、安全パトロール中のステッカーなどもそうだし、お母さんたちに自転車のかごに〇〇パトロール隊みたいに掲げてもらっている自治体もあるが、知恵を出せば色々な方法があると思う。一つ一つの方法が、長い間やっているとマンネリ化してくるような面があるので、随時更新しながら、必要に応じて衣替えしながらやっていくことが必要だと思っている。

## 委員

先ほどのボランティアで見守りをされている方々について、本当にありがたいと思った。子どもたちが感謝の言葉を口にしたりしているというのを聞くと、いずれその子どもたちも、地域の子どもの地域で育ててもらったのだなという思いがして、また、その地域の子どもの健全な育成にうまくいってもらえるという期待もできると思う。振り返って、私が見守りということは何をしているかということ、恥ずかしい話、どうせ仕事をしているから自分ではできないというところで、やはり出来るのは出来る人がやるのかなとみていた自分がいるのが恥ずかしい。せめて何が出来るのかなと思った時に、もしご家庭にお年寄りなり、どなたかいらっしゃるならば、やはりその登下校時に、出られるときに外に出てもらうというのが当然いいわけだから、社員の家庭に、お年寄りがうちにいるようだったら、下校時にちょっと外に立ってみてくださいと、例えばそんなこと一つ試してみても少しは違うかもしれない。少なくとも直接できないければ、直接できないなりに何をしたらいいのかという、もっといろんな考えをするべきであるとビデオを見ながら思った。

## 市長

学校から上がってくる報告等の中で、子どもが絡むヒヤリとする情報は、どのようなものがあるか。

## 事務局

車から写真を撮られた等がある。それが実際、その子を取ったのかというのは、わからない。あくまでも受け止め方になるので、そういった事例はけっこう出てくる。あとは、すれ違い際に自転車で声をかけられるとか、本当にその人は困って声をかけたのかもしれないが、今はいろんな状況があるので、それで不審者的な声掛け事案ということで、上がってくる場合もある。

## 教育長

この間、警察の大貫署長と話す機会があったが、大貫署長が言うには、要は、犯罪者にここの地域は入りにくいぞと、そういうイメージを与えるという地域の環境づくりが大事なのではないかとのことだった。まさに私もそのとおりだと思う。では、犯罪者が、ここは入りにくいぞというのはどういうところなのかというと、やはり今も話が出た、多くの人の目が光っているというか、見守りが行われているところだということもあるだろう。

意外と気を付けなければいけないのは、落書きが多い、あるいはごみが落ちている、空き缶が捨てられている、そういったところは意外と犯罪が起きやすい場所じゃないかと思う。

そして、三つ目は日頃のこの子はどこの家の孫だとか、どこの子どもだというのは、やはり近所同士、もう少し日頃の地域のいろんな行事にお互いに参加しあって、地域のクリーン活動でも、お祭りでもいいが、そういうところなるべく多くの人の日頃から、顔見知りになって、あいさつ運動や、声掛け運動を、やっていただくと、そういうことが結局何か起きた時だけ何かしなくてはではなくて、日頃からの持続可能な防犯に繋がっていく、根っこになっていくのではないかと思う。今、本当に多くの団体で、子どもの見守りやパトロールをやっていただいている。本当にありがたいが、それプラス今言った近所づきあい、そういったものをますます強めていきたいものだと思っている。

## 市長

今、教育長の話聞いていて、私も時々市民の集まりで、そのような話をあいさつの中でさせていただくが、大貫署長がおっしゃったのはまさにその通りで、空き巣がどこの家に入ろうと狙う時に、地域がどれだけだらしがないか、あるいはきちんとしているかというのを彼らはよく見ている。例えば、公園の自治会のポスターが、5年も前のポスターが張ってあって、ボロボロになっている、これは全然地域のコミュニティが近所に、あるいは地域活動に興味がないところだなと思うと、空き巣は狙いやすい。例えば、あるいは、公園の落書きみたいなことでいうと、落書きを全然消さないで放っておくようなだらしがない地域というのはきっと緩いのだろうというので狙いやすい。実際につかまった空き巣などに話を聞くと、そんなことが実際に出てくる。それでいうと、空き

巣がどこを狙おうかなと物色しているときに一番いやなのは、すれ違った人とかにあいさつをされるのが一番いやだという話がある。「こんにちは」とあいさつされると当然居心地が悪いわけである。実は、そのあいさつ一つとっても、地域の防犯力という意味では、無益ではない、大変大きな役割を果たしている。

これは実は、ニューヨークにかつて、ジュリアーニという市長がいて、ニューヨークの治安を劇的に改善したが、ニューヨークの地下鉄なども今はかなり安心して乗れる時代になったが、かつては落書きしっぱなしで、日本人の旅行者が行っても、地下鉄には絶対に乗るなという時代が続いたわけですけれども、その劇的に改善した考え方がこの考え方である。英語で言うとコミュニティポリシングという。「FIXING BROKEN WINDOWS」という有名な本があって、要するに空き家の窓が割れたままに放置していると、どんどんそれをきっかけに治安が悪くなる。窓が割れたらすぐ直しておくのと、いい治安が維持できる。

要するに、先ほど話したポスターの話と一緒にのだが、実はニューヨークの治安を劇的に改善したのはこの考え方である。さらに、そこに日本の交番制度とか、あと、今アメリカでは、お巡りさんが自転車でパトロールもやっている。もう日本の交番制度を参考にしてからずいぶん経っている。僕がアメリカにいる時にも、スポーツタイプの自転車で、ヘルメットを被って、警察官の制服だった。かつて、ニューヨークのおまわりさんが、パトカー以外でパトロールするなんて考えられなかったが、それも同じような考え方からきている。

そういう意味で何が言いたいかということ、要するに地域の防犯力というのはそういう普段の地域コミュニティの強さというのが防犯力にそのままつながるということだと思っているので、そういう話をこちらから折に触れて、こちら自治会、自治会長さんを含めた人たちに話をしていきたいと思っている。

では、そろそろ予定していた時間が来たので、この辺で一区切りということにしたいと思う。ビデオも見させてもらったし、打ち合わせの時にできるだけ視覚に訴えかけるような準備をとお願ひして、大変私自身も具体的なイメージを持ちながら話のできたので、事務局も準備をさせていただいて、ありがたく思っている。

それでは、これで、平成30年度の第1回総合教育会議を終了ということにしたいと思う。

○閉会 午後4時50分